

急増するコロナ感染で災害医療体制

重要な役割果たす発熱外来で DMAT が対応

コロナ禍の第7波が7月に入って猛威を振るい、城西病院の発熱外来にも8月に入って連日100人、多い時には170人の患者様が詰めかけました。茨城県内では、新規陽性者が1日4,500人を超える日が続き、結城市だけでも1日の新規陽性者が100人を超える日がありました。

城西病院では、この事態を災害と認識し、DMAT（災害派遣医療チーム）をはじめ、病院内の各部署から応援体制を組んで、この非常事態に対応。発熱外来、ワクチン接種、メディカルチェック、コロナ病棟、コロナ救急搬送、フォローアップセンターの6つの機能を持つ達生堂コロナセンターを立ち上げ、コロナ禍と向き合ってきました。

発熱外来の患者様は、結城市内はもちろん、筑西市や古河市、常総市、美浦村、坂東市、栃木県は小山市、佐野市、栃木市、宇都宮市と広範囲にわたりました。

発熱外来にかかわる職員は、背中にDMATと書かれた黒のTシャツに身を包み、駐車場では車が安全に通行できるように誘導し、車越しに問診や診療、薬の受け渡しなどを行っていました。基礎疾患を持っている方や症状の重い方を中心にプレハブ室で診察を行い、CT検査などで入院が必要な方はすぐに対応できるようにしました。全国的に発熱外来をなかなか受けられないという状況の中で、片道1時間以上もかけて受診に訪れる方もいました。

救急車も発熱の患者様の搬送先に苦慮している状況でした。ひたちなか市の60歳代の女性は、呼吸困難となって救急車を依頼、県央地域のいくつかの病院で搬送を断られ、茨城県の入院調整本部で全県の医療機関に受け入れを要請し、城西病院で受け入れました。救急車だけでなく、コロナ禍で受診控えの人も増え、治療が遅れるケースもありました。10月に入ろうとし、感染者数も減少しましたが、コロナ禍についてはどのような経緯をたどろうとも、常に患者様に寄り添う病院として取り組んでいきます。

2022年9月28日



ひたちなか市から救急搬送

